

# パブリックリレーションズを通じた高校現場 における授業実践の一考察

～自己選択できる生徒の育成～

三浦 学

正会員 星の杜中学校・高等学校 321-3223 栃木県宇都宮市清原台6-18-1

E-mail:geo.earthplane2015@gmail.com

高等学校で総合的な探究の時間が導入され、授業改革が進んでいる。筆者は学習者が自分の学びを選択できる力を育成するため、探究学習とリフレクションを重視している。プロジェクトベース学習（PBL）を取り入れ、生徒が主体的に活動できる場を作り、双方向コミュニケーションを促進。さらに、ICTを活用し、生徒一人ひとりに合わせた個別最適化学習を推進することで、学びの質と学習者の主体性を高めることを目指している。

**キーワード** : 自己選択力/探究学習/問いづくり/授業デザイン/リフレクション

## はじめに

高等学校において、総合的な探究の時間が開設され、それに伴い授業改革の波が教育現場に広がっている。「何を教えるか、どう教えるか」から「何を学ぶのか、どう学ぶのか」への大きな転換が求められ、学びの主語も教師から学習者へと移行しつつある。このような中、筆者は学習者が自分たちの学びを「自分で選択できる力」を身につけることを目指して教育活動に取り組んでいる。探究学習において重要とされる「問いをつくる力」と「リフレクション」を重視し、生徒の興味・関心から始まり、課題設定、情報収集、整理分析、まとめ・表現する探究のサイクルを総合的な探究の時間だけでなく、普通教科にも取り入れている。そして、その学びの核として「パブリックリレーションズ」の考えを教室に取り入れ、思考する教育を展開している。

## パブリックリレーションズの考え

筆者は学校の学びと実社会の窓口として、パブリックリレーションズの考えを導入している。パ

ブリックリレーションズは「個人や組織が目標や目的を達成するために関係する人や団体（＝パブリック）と良い関係（＝リレーション）を構築する活動」と定義される。そのための三つの柱として①倫理観、②双方向コミュニケーション、③自己修正が掲げられている。探究する教室をつくるためには教師からの一方向の指示する授業ではなく、学習者自身が思考する教室をつくるために、パブリックリレーションズの考えを学びの中核に据え、学習者たちの「wonder（不思議、驚き）」を大切にしながら、「問いをつくる力」と「リフレクション」を重視する。

## パブリックリレーションズの展開に向けた 授業実践

授業を展開するにあたり、筆者は5年前からPBL（Project-based-learning）を授業に導入し、「場をつくる」ことを意識し始めた。学びの責任を学習者に委ねる中で、悩んでいたときにパブリックリレーションズと出会い、その視点が生徒たちの主体的な活動と共創を促すことに気付かされた。多様性を尊重し、「誰も取り残さない」

全員で合意形成しながら最上位目標を対話の中で確認することで、より良い生徒の未来を築く手助けとなる。そして、VUCAの時代といわれる現代において、学習者たちが多くの人や地域、企業等と共に行動し、新しい時代を創ることを体験できるよう、教科での授業や総合的な探究の時間、LHR等で実践している。

## 学びのコペルニクスの転換

学習者の「Wonder（不思議、驚き）」を切り開くためには、問いをつくるスキルが必要である。教師が問いを投げかける形式から、学習者自身が問いを表現し、学びに向かうスキルを身につけることで、学習者は問いを通じて自分の思考の視野を広げることができる。現在の教育には、社会の変化に対応し、グローバルな学びやデジタル活用スキルが必要とされるが、これによってカリキュラムのオーバーロードが問題となり、学習者の深い学びの時間が減少している。学習時間の増加が必ずしも学習成果に結びつかないことから、学習の質や学習者のWell-Beingに焦点を当てることが重要である。

筆者は探究学習を教科に応用し、他教科と関連させながら学びの質を高めるため、「問いを創ること」を取り入れ、概念ベースの学びに転換した。具体的には、「事実（知る）、理解する（概念）、できるようになる（スキル）」の学びを実践し、その中核に「パブリックリレーションズ」の考えを置いた。学習者たちは授業で自分たちの安心安全な場を作り、相互にコミュニケーションしながら目標に向かって学びのゴールを目指した。学びの成果物として、動画作成、スライド作成、デジタルブック作成、ポスター作成などで表現し、一連の学びを軸にした探究活動を展開した。

## パブリックリレーションズと探究

高校の歴史総合科目において、パブリックリレーションズのライフサイクルモデルを活用した学習活動の実践を試みた。授業は以下のステップに従って進行した。

### 1. アクティブ・ブック・ダイアログによるジグソー学習

アクティブ・ブック・ダイアログを用いたジグソー学習を行い、生徒が協働して情報を理解する基盤を作った。各生徒が特定のパートを担当し、その内容をグループ内で共有することで、全体像を構築した。

### 2. 学びのストーリー化

学習内容を物語形式で整理し、理解を深めるために学びのストーリー化を行った。これにより、学んだ内容を時系列や因果関係に基づいて再構築し、より深い理解を促した。

### 3. 問いをつくる力の養成

学習の基礎づくりとして、問いをつくる力を養成した。具体的には、以下の三種類の問いを用いた。

#### ① 事実を問う問い

具体的な事実やデータに関する質問。

#### ② 概念化をする問い

学びの理解を深めるための問い。

#### ③ 振り返りをする問い

思考を振り返り対話を促進する質問

### 4. ライフサイクルモデルを活用した学びの展開

ライフサイクルモデルを活用し、以下のプロセスで学びを展開した。

#### ① パブリックリレーションズ目標の設定

単元を通してのパブリックリレーションズ目標を決めるため、ベンチマークを設定し、KWL シンキングツールを活用した。

#### ② ターゲットの設定

学びの内容をよりよく理解してもらうための対象者（ターゲット）を決定し、エクストリームユーザーを設定した。

#### ③ 戦略の考案

どのように情報を伝えるかについて戦略を立てた。

#### ④ プログラムの策定

どのようなスケジュールで進めるかについて計画を立てた。

#### ⑤ 実行：ブランディングを意識した制作物を作成を検討している。

#### ⑥ 評価

互いに鑑賞し合い、フィードバックを

予定している。

#### ⑦リフレクション

ORID (Objective, Reflective, Interpretive, Decisional) 手法を用いて振り返りを行った。

#### 5. 教師の役割

教師は学習の各段階で適切に介入し、答えを教えるのではなく、生徒への問いかけを通じて学びをサポートした。

この取り組みにより、生徒はパブリックリレーションズ概念を実際の学習に応用し、協働的かつ主体的な学びを深めることができつつある。教師の問いかけを通じた支援により、生徒は自ら考える力を養い、学びの質を向上させている姿が見受けられる。

#### 今後の展開

星の杜中学校・高等学校で勤務し始めて4ヶ月が経過したところである。現在は学びの転換を生徒と共に進んでいる段階である。筆者自身の授業を振り返ると、情報技術の発展と社会の大きな変容は教育活動に新たな可能性を見出してくれた。個別最適化の学びとICTの創造教育を融合することで、学習者一人ひとりの「Wonder」を探究し、主体的な学びを促進できる環境が創られている。そのような状況の中で、従来の画一的な教育では画一的なカリキュラムと画一的な指導方法によって学習者の個性や可能性が十分に引き出せていなかった。しかし、個別最適化された学びでは、一人ひとりの理解度や興味・関心に合わせた学習が可能となり、主体的に学ぶ意欲を高めることができると実感している。

ICTツールを活用することで、学習者たちは多様なアプリケーションに触れ、創造性を発揮するための手段を得ることができた。高校1年生は、自分自身のキャリア選択や将来像を意識し始める大切な時期にあたる。このタイミングで、個別最適化×創造教育×ICTを融合した学習を導入することで、学習者たちは主体的に学び、自らの可能性を発見し、未来への扉を開くことができると確信している。

例えば、総合的な探究の時間だけでなく、教科学習の中にも探究型学習を取り入れ、生徒たちが

「Wonder」に触れ、その解決策を提案する学習を行うことを目指している。ICTツールを活用して情報収集や資料作成を行い、グループワークを通して意見交換や議論を深めていく。この過程で、生徒たちは主体的に学び、協調性や問題解決能力を養うことができる。この学びのプロセスの中でパブリックリレーションズの考えが非常に有効であると確認している。

#### まとめ

高等学校における授業は「大学入試」や「就職試験」のためではなく、学習指導要領に示される「持続可能な社会づくりの創り手」を育成することに重きを置きたい。「知識・技能」「思考・判断・表現力」「学びに向かう力・人間性」などの「資質・能力」を学習者自身が自分の力で身につけることが重要であり、それらを育む授業を展開していくことが求められている。教師が学習者を信頼し、授業の舵取りを任せることで、学習者が自発的に学ぶ姿勢が育成されていくと考えている。

#### 参考文献

- ・高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間」、文部科学省、2018
- ・井之上喬(2024)、「パブリックリレーションズ 第3版」、日本評論社
- ・井澤友郭(2020)、「問う力が最強の思考ツールである」、フォレスト出版
- ・ダン・ロススタイン(2015)、「たった一つを変えるだけ」、新評論
- ・リン・エリクソン他(2020)、「思考する教室を作る概念型カリキュラムの理論と実践」、北大路書房

